

＝ わたしの3.11 ＝

今年で東日本大震災から8年目を迎えます。3月はきっと何年とうとも、わたしたちにとって特別な意味を持つことでしょう。右の①②③について、職員一人一人に質問しました。どうかその声を聞いてください。

- ①3.11のあの日、何をしていましたか？
- ②あの日から、何をなくして、何を新しく得ましたか。
- ③今の自分のいる地域をどう感じますか？

— 大槌事務所 —



《中居 知子》

①当時は建設業者の経理として従事していました。あの日、大槌町で菓子店を営んでいる高齢のご主人が家電を購入した際のリサイクルポイントを旅行券に替える手続きをしに来所されました。「長年連れ添ったカミさんと温泉に行きたい」と笑顔で語った願いは叶わず、あと10分わたしが引き止めておけば…と今でも悔やまれます。

②わたしは自宅・実家・家族ともに無事でした。ここでは、そのすべてを失った方が当然のように存在します。すべてがその上に成り立つ学びであることを念頭におかなければと常々感じます。

③失ったもの以上に得るものがなければ嘘になるほど、ここは失われたものが多すぎる場所です。ここに住むすべての人々が、自身が活かされた意味と唯一無二の存在であるということに気づける地域になることを願い、取り組んでいます。



《豊間根 純一》

①東京で配送の仕事をしており、細い商店街の一角にちょうど車を停めた所でした。車が突然上下左右に船の上にいるように揺れ、強風で揺れているのかなと思った瞬間、全てのお店から人が飛び出して来ました。

②僕自身は直接の被害を受けていませんが、おばあちゃんとの思い出の品、家族や友達との思い出の風景を無くしました。代わって新しい仲間との風景や、町の財産の再認識、町の今後の課題を新しく得たと思っています。

②町民の数が減っていて学校運営や除雪作業等の行政サービスも満足にできなくなっておりとても限界の地域だと感じています。有志をはじめ町民や外部の方々、特に若者で知恵を出し合って将来の町を決めていかないといけないと感じています。また、喫緊の課題は人口確保と子どもの確保だと考えています。



《石曾根 雪子》

失ったものが多すぎて、思い出したくありません。それが正直な気持ちです。



《村上 清夏》

失ったものが多く、また当時を思い出すことは家族みな避けてきました。新しく得たものは借金だけです。



2018年4月は右写真のような5人のメンバーで、大槌事務所がスタートしました。それから1年。出会った方々と一緒に、何が出来るかを迷いながら活動して来ましたが、現在はメンバー2人が入れ替わっておりますが、これまで大切にしてきたチームとして、また、一人一人がそれぞれの思いを抱えながら、進んで行きたいです。

一大船渡事務所一



《平山 康男》

①前職で滋賀県に出張しており、関西で揺れを感じ、ニュースで東北沿岸が想像を絶する状況になっていることを知る。会議を取り止めて東京に戻ろうとしたが新幹線や飛行機もストップして帰宅難民になっていた。

②特になくしたものは無いが、人として自分ができることは何かを自問自答している時に、岩手に赴任するきっかけとなる機会が与えられた。

③大船渡へ移住して2年が経ちました。家族の理解のお陰で自分の思いが叶っている。今では家族が地域に溶け込み楽しく過ごしている姿をみると“ここに来て間違いではなかった”と確信している。少子高齢化、人口減少、交通の便の悪さ等のマイナスイメージが多いが、人柄の良さや都会では味わうことができないふれあいがここにはある。是非、大船渡に来て体験して下さい！



《小濱 啓介》

①3.11の14時46分、抜けるような内陸の青空の中、私は家族、友人と一緒に花巻の街中をドライブ中でした。急ぎ安全と思われる場所に車を停止させ、道路が波打ち、人々が戸惑いながら屋内から吐き出されて来るのを、震える脚を家族や友人に見られないよう、眺めていたのを今でも明瞭に思い返せます。

②その日から3週間とたたないうちに6年頑張った黒転させた職場を解雇となり、6か月後に対人支援に取り組むために資格を取得し、そしてさらに4か月後対人支援を実行する職場を得ました。

③8年を経た今、私の住む町釜石は震災前よりは一見活気があるように感じられます。でもそれはつまり、元々の利権者と元々元気のある人達が結果的に追い風を受けているだけに過ぎないという印象が拭い難いです。



《遠藤 真由美》

①仕事でお客様にお会いする予定でした。

②幼い頃からの思い出の景色やお世話になった人々を失い、新たに全国の皆様の暖かい支援の輪をととても感じました。

③震災後、高齢者の一人暮らしがととても増えたように感じています。皆さん一緒に、周りに迷惑を掛けたくないとギリギリの状態になるまで頑張っています。震災から8年が過ぎようとしています。訪問世帯でも亡くられる方が増えておりとても寂しく感じています。



《佐々木 敦子》

①家が崩れるかと思うほど経験のない大きな揺れに慄き、猫を外に逃がそうとガラス戸にすがり乍ら大声で猫たちの名前を叫んでいたが、猫は家の奥へ奥へと避難していた

②実家と子供時代の思い出の品が流出した。が、実家が流出したことを知ったのは3.11から数日後だった。余震の恐怖と津波被害の甚大さを目前にして周囲にまで思いを巡らす余裕などなかった。あの日以来、自分に出来ることを問い続け共生地域創造財団に辿り着いた。

③震災前の風景を懐かしみつつ、新しい街を受け入れる。



《長野 守》

①前職（学校教材販売会社）で小学校卒業式用の卒業記念品納品の営業活動の最中の出来事、次の訪問校へ向かうべく信号待ちをしていた。

②出がけに見てきた陸前高田の街並みと近隣の人々が目の前から消えたことが一番。夢か現実かと驚き慄いていた時、続々と訪れる大型バスの中から幾人ものボランティアの存在に励まされ温かさに触れたものである。自衛隊の態度や行いに我々は一人ではないと人の心の有難さが染み入ったものです。

③陸前高田のまちは、いまだ復興途上にある。



《村上 一彦》

①3.11のあの日は、自宅（古い木造の貸家）で、強く・長い揺れで土壁が剥がれ落ちる中、家がつぶれる恐怖を感じながら、外に飛び出したことを思い出します

②地域の行事に参加しない私でした。発災後、不安から助けを求めに行った避難所でしたが、物資配布の手伝いなどを続けるうちに、地域との関わり住民同士のつながりの大切さを痛感しました。

③自分のいる地域（災害公営住宅）は高齢化率が高く、男性独居の方が多く、住民同士が何でつながりを持てるかを考え・実践していきたいと思っています。

—大船渡事務所—



《黄川 美保子》

①発災時は大船渡税務署で臨時職員として仕事をしていました。地震の時はコピー機が右に左にと動き怖かった思いをしました。電気が消えてしまい、仕事にならなかったため、帰っていいですと言われた。2人の子供が気になり、やっとの思いで自宅に帰ったが、津波の影響で住める状態ではなかった。私自身は津波を見ていなかったが、2人の子供は高い所から津波を見ていたため、心のケアが大変だった。

②あの日から住むところを無くし、交通手段と仕事を無くしましたが、家族の絆や地域の団結力・人を思いやる気持ちを得ることができました。

③津波の影響で住民は減りましたが、平常を取戻しつつあるように感じます。支援をしてくれた大学があるが、依存傾向にあり、役員と住民の間に壁があるように感じます。



《芳賀 あゆみ》

①仕事でお客様の所にいました。津波は見えていません。大きな揺れで高齢者のお婆さんを外へ出そうと思いつつも説得、しかし動いてくれずどうしようかと思つてるところ息子さんが帰宅。津波の影響で戻る事はできず、立根方面へ向かい友人とその実家でお世話になり、自宅に近い県立大船渡病院の駐車場へ向かいました。2人でどうにか自宅へ向かおうと歩き出しましたが、瓦礫の山、雪がちらつく真っ暗な中前へ進めず、車に戻り一晩過ごしました。

②実家に置いてあったアルバム（写真）（実家は全壊、人は無事）。新しい出会いと、新たな思い出

③地域的に世帯数も多ことからお互い様がありません。他の世帯が少ない地域は、お互い様が出来ているように感じます。



《村上 富美》

①仕事中でした。魚市場内に事務所があり目の前が海(大船渡湾内)で、「潮が引き始めているから早く逃げろ！」と言われ一目散に高台に逃げました。

②職をなくした。人のためにできることはないか、と思う気持ちが芽生えた。

③岩手県大船渡市は、見た目の復興は早いほうだと思う。市内全体が平均的に進んでいるわけではないが商店街だった大船渡町内の建物は順調に建設されていると感じる。ただ訪問していると未だ悲しみから抜け出せないでいる方の多さに気づかされます。

—石巻事務所—



《末永 博》

①東日本大震災発災時、私は休暇中で石巻漁港で釣りを楽しんでいたところ巨大な地震が発生した。車で自宅へ向かう国道が大渋滞。カーラジ

オから大津波警報が聞こえ車を放置し道路沿いの山道へ逃げ一命を取り留めた。愛車が流されたが幸い、このようにして活かされている。

②あの日を境に無くしたものは「自分自身のエゴ」新しく得たものは「生かされた者の使命」。

③震災を契機に市民活動を行う中で故郷・石巻において食べることに事欠く「生活に困っている人」の多さに驚いた。今の自分ができること、必要とされていることを実直に継続し取組んでいきたい。ハード面の復興・復旧は可視可できるが被災者の生活再建は（ソフト面）はまだまだ途上にある。



《佐藤 秀子》

①「東部保健福祉事務所 母子障害班」（石巻合同庁舎1F）に勤務していた。当日午後は女川・渡波方面の訪問予定だったが急遽変更になり

事務所に残り、眠気と戦いながらパソコンに向かっていた。とても天気が良く穏やかな午後だった。

②仕事上では自分が担当していた対象者5人を津波により失ってしまった。喪失感の中、今日の前にいる相談者を救いたいとの思いで必死に仕事をこなした。日常の当たり前有難さを実感した。

③特に魅力は感じていないと言うのが正直な気持ちです。

—石巻事務所—



《森 雄人》

①夕方から仙台へ遊びに行く予定があったので、仕事を半休し祖母と二人で自宅にいました。そのまま自宅で被災し一晩を過ごしました。

②実家を失いました。6年前に仙台に新しい実家建てましたが、そこを実家と呼ぶのにはいまだ抵抗を感じます。

③石巻市をイオン株式会社が買い取ったらおもしろいだろうなと考えています。



《梶原 理穂》

①当時高校2年生、地元愛媛県の高校に通っており、震災発生時刻は職員室に居ました。自宅に帰りテレビを通して見た遠い東北の地の悲惨な光景にことばを失いました。

②スタッフも含め、東北に来なければ会うことのなかった「人との出会い」があり、その出会いから「石巻」でしか学ぶことの出来ない経験を得ました。

③石巻に越して1年半近くが経とうとしています。生まれ育った場所とは全く異なる環境に未だに慣れないです。



《佐藤 良子》

①仙台で長女の卒業式が間もなく終了する間に震災が起きました。3000人以上いた会場で、娘が心配な私は一番最後まで揺れの中に残っていました。スポットライトが落ちてきた瞬間、“まずいっ”と思いダ

ッシュで避難しました。長女は私が喫煙コーナーに居ると思い探していたとのことで、さすがにそれはないよと苦笑しました。

②無くしたものは今まで抱いていた拘りで、視点を新しく変えて多くの価値観を得ました。

③繋がりがあがる地区とあまり無い地区があるのではと感じる。老若男女問わず、孤独な心を抱えている人が居る。その存在に気付いて支え合える地域が増えていけたらと願います。



《吉田 菊恵》

①石巻市内で仕事の打ち合わせが終わり、帰り支度をしていた時に発災。水が引かず避難所にも行けない状態で自宅に帰れたのは1週間後でした。

②それまで当たり前にあると思っていたもの。大好きな東北の自然と食べ物が汚されたと感じています。得たものは信じるに足るもの。

③お願いだからどんな命でも大切に考えて欲しい。何かを守るために、人を傷つける方法ではなく、共に存在しあえる道を探すという希望を見つけてもらいたい。



それぞれが新年の決意を新たに、石巻と歩んでいきます。

色々な個性が集うメンバーでスタートした4月。





《石井 優太》

①都内のビルで仕事をしていました。遠方の地震とは思わず、都心壊滅を予感しました。

②何が出来るかも分からずボランティア参加し、想いを持つ人たちと出会い、財団活動に加わりました。未だに何が出来るか分かりませんが、小さな想いや行動が出会いを生み、それが次の可能性に繋がることを知りました。出会いの分、自己都合で人生を選ぶ自由は失ったかもしれませんが、背中を押してくれる多くの応援を得ました。

③初めて来てから8年、移住してから7年が経ちます。まだお世話になりそうです。



《多々良 言水》

①当時は大学を休学中。発災時は東京の自宅で勉強していました。地元東北の惨状を目の前にして休学延長を決め、地元へ帰る決心をしました。

②福島原発事故の影響で家族が関西へ自主避難しました。ずっと続くと考えていた「日常」は震災と原発事故で失われた気がします。ただ、地元東北でのボランティア活動を通じて自分でも驚くほど郷土愛が生まれました。

③仙台に住み石巻が職場です。両都市を結ぶ仙石線は菜の花畑を抜けて海沿いを走ります。東北の豊かな自然は誇りに思います。



《熊谷 新二》

①あの日、仕事で2 tトラックを借りるために、職場から1 kmほど離れた施設にいた。2時46分、地鳴りとともに大きな横揺れが始まり、足元の地面が割れ始めた。大きな横揺れの中、職場に戻った後、とてつもない破壊音とともに黒い飛沫が上がったのが3時30分頃、当時いた職場は、大津波の際から直線で200mほど離れた高台にあったが、それまで木々や町並みで見えなかった景色がいきなり開け、海が見えるようになった。それからの3日間、家族や友人の消息が掴めず、焦燥感の連続だった。

②住み続けるはずだった自宅、押し入れにしまっていた本やレコードのコレクション、思い出の品、将来耕す予定だった農地のすべてを失った。新しく得たものは、人との「出会い」と「つながり」による「希望」。

③荒んでしまった。市役所では70名近い職員が津波の犠牲になり、その多くが将来を担っていた優秀な職員だった。多額の交付金、復興資金が町を狂わせているように感じる。巷では知人が激減、スーパーに買い物に行っても、知らない人が増えた。人口18,000人ほどの町にあっても、様々な分断が起きているように感じている。

活動支援金寄付のお願い

長期的な支援を実現するために一人でも多くの皆様に応援していただければ幸いです。

◇郵便局から振替の場合

郵便振替：02250-6-126459

口座名：公益財団法人 共生地域創造財団

◇郵便局以外から送金の場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名 二二九店（二ニキュウ店）

口座 当座

口座番号：0126459

口座名：公益財団法人 共生地域創造財団